

氏名(本籍)	ないとうさだとし (埼玉県)		
学位の種類	博士(芸術学)		
学位記番号	博乙第2369号		
学位授与年月日	平成20年3月25日		
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	アクリル絵具と油絵具の併用による混合技法		
主査	筑波大学教授	博士(芸術学)	岡崎昭夫
副査	筑波大学教授		玉川信一
副査	筑波大学教授	博士(芸術学)	守屋正彦
副査	宇都宮大学准教授	博士(芸術学)	石崎和宏

論文の内容の要旨

(目的)

本研究の目的は、アクリル絵具と油絵具を併用して、いわゆる「混合技法」的に扱うという全く新しい描画技術の提案であり、それによる独自の絵画技法領域の開拓である。

「混合技法」は、テンペラと油絵具の重層構造による古典的な描画技法として一般化されているもので、テンペラと油絵具を交互に何層にも塗り重ねることによって成立する技術である。一方、「アクリル絵具と油絵具の併用技法」は水性から油性への移行型の描画技法として現在広く使用されている。アクリル絵具の塗布面に油絵具を塗布する技法はそれぞれの描画材としての欠点を補いつつ、水性画材の上に油性画材を塗り重ねるということで、画面の堅牢性をも担保する理にかなった技法である。この技法では、油性画材である油絵具の上に水性画材であるアクリル絵具を塗り重ねるといふことはあり得なかった。

本論ではアクリル絵具と油絵具を交互に何層も塗り重ねる往復可能な独自の技法を提案し、その理論的基礎と実践的技術をまとめることで、新しい絵画技法の確立を目指すものである。

(対象と方法)

本論の研究対象は、著者が実践する制作における技法そのものである。その技法が絵画技法全体の中でどのような位置づけにあるのかを客観的に明らかにした上で、その技法の学術的背景を明確にし、制作過程を詳述する。

第1部は、「アクリル絵具と油絵具の併用による混合技法」という用語の選択がどのような経緯で決められたかを述べた上で、それがどのような絵画技法の原理によって成立するのかを明確にし、絵画技法全体の中でどのように位置づけられるのかを明らかにする。ここでは、絵画技法を絵具定着の原理からパステル型、絵具型、砂絵型、染料型、支持体加工型の5つの型に独自に分類する。その上でこの技法がパステル型、絵具型、砂絵型の複数の原理によって成り立っているとす。

第2部では、著者がこの技法に至るまでの学術的背景及び技法の変遷についてまとめている。「油絵の科学」(山下新太郎 1948) から「絵画・素材・技法」(武蔵野美術大学油絵研究室 2002) までの、技法に関する19の主要な専門書を、歴史的に特にエポックメイキングなラングレの「油彩画の技術」(1968)、デルナーの「絵

画技術体系」(1980)を中心に網羅的に概説した上で、著者の制作が「油彩画の技術」から受けた影響から始まり、「アクリル絵具と油絵具の併用による混合技法」に向かってどのように変化してきたのかを詳述する。

第3部技法の実践では、この技法を再現する場合の支持体の選択－合板パネルの実態と選択の経緯、下地の作成－紙の使用、地塗りと研磨、描画方法－モチーフの設置、下絵の描画と定着、有色下地の設定、油性画溶液の特性と調合を詳述し、制作過程を写真図板等で明らかにしている。最後にこの技法の持つ技術的な問題点について述べている。

(結果)

第1部「アクリル絵具と油絵具の併用による混合技法」という用語の使用について、安易に使われている技法用語を様々な想定の下に検証した結果、最も誤解の可能性の少ないものとして採用する。次に絵画技法の原理のうちで、特に本研究に関連する絵具の接着の原理について分析する。顔料と媒材によって構成される絵具は、どのようなメカニズムで画面上に接着されるのかという観点から絵具型、パステル型、砂絵型に分類し、更にそれ以外の原理として染料型と支持体加工型を想定する。その上で、「アクリル絵具と油絵具の併用による混合技法」が、絵具型絵画技法の原理と砂絵型絵画技法の原理の適用による描画の上に絵具型絵画技法の原理とパステル型絵画技法の原理の適用によるグレースを施し、それらが交互に繰り返されることによって成り立っていることが確認できた。

第2部では、1968年以前と以降の主要な技法書の違いを視点にすえ概説している。1950年ごろに開発されたアクリル絵具の技法書については一般向けを別にすればアクリル絵具単独の専門技法書は少ない。ダズビエ・ド・ラングレの「油彩画の技術」(1968和訳刊行)から受けた影響を下に卵や乳剤を用いてアクリル絵具と油絵具の関係を変える発想を得て、さまざまな市販品、自製品による試行錯誤を経て、現在の技法に辿り着いた経過を述べている。その間の過度的技法の適用された作品も含めて、多くの発表作品によってこの技法の試みが検証された。

第3部は、この技法の実現の上で必要とされる具体的な描画材の選択と制作過程の提示である。支持体の条件を耐久性、強度、取り扱いやすさ、経済性とし、ラワンベニヤ合板パネル、織布、不織布、紙を様々な組み合わせで調製しながら用いること。地塗りは、アクリル系地塗り塗料、ポローニャ石膏、を用い、400番の紙やすりと、水、アクリルグロスメディウムで研磨すること。平滑な白色下地の上に鉛筆で下絵を描画し、その上にアクリル絵具と油絵具で交互に着色していくこと。この間に使用する油性画溶液に求める性質を、アクリル絵具を接着する能力と光沢と深みが得られることとし、ダンマル樹脂、ケトン系樹脂、アルキド樹脂系メディウム等を適切に調合し、その画溶液をその都度調整して使用すること、等を図解しながら詳しく解説している。

(考察)

この技法の最大の問題点は、アクリル絵具と油絵具の接着の状態の確認にある。制作実験当初には、制作途中で剥落ないし剥離、ひび割れが生じる場合があった。これは、アクリル絵具を貼り付けるための接着剤にあたる油絵具ないし油性ニスが十分に機能していなかったと推測される。この件については、油絵具ないし油性ニスの配合成分等に配慮するとともに、アクリル絵具と油絵具を交互に重層化する制作過程において、手際よくその作業を進めることで解決されると思われる。実際その後に制作された作品に特に大きな問題は発生していない。また、過度的技法ないしこの技法を使用した作品は、10年以上を経過した現在特に大きな経年変化は認められない。本研究で詳述してきた「アクリル絵具と油絵具の併用による混合技法」の理論的な根拠と実践的技術は、この事実を持ってほぼ確立されたと思われる。

今後は、比較的新しい画材としてのアクリル絵具を使用する技法の一形態として、この技法を絵画技法史上にどのように位置づけ、画家として更に緻密で自由度の高い技法開拓ができるかが課題である。

審査の結果の要旨

本研究は、画家として制作を続けてきた内藤定壽氏が辿り着いた極めて独自性の強い技法の提案である。油性描画材の上に水性描画材を塗り重ねるという、従来タブー視されてきたことの実行は、そのことが可能であるということを明らかにしただけでも大きな意味がある。アクリル絵具が開発され一般化している現在においても、そのこと自体は今までほとんど試行されてこなかった。少なくともこの技法が氏の制作の上で試行されて以来現在に至るまで、特に経年変化に問題が見られないという見解が得られているのは特筆に値する。氏が長年の制作の中で培ってきた理論と実践の結実がこの技法の開発であり、結果としての作品の精緻で叙情的な作風につながっていることも高く評価したい。

絵画技法を科学的に分析する学問としての方向性を示しながらも、混合技法が著者の経験的判断と無関係でないために惹起する、技法の敷衍化に至っていない点がこれからの課題であろう。また、この技法が油彩画、アクリル画それぞれの特徴を相殺する内容を孕んでおり、技法による効果、表現の差異、その利点について、客観的なレビューを果たす必要があり、更なる絵画技法史の検証を期待したい。

よって、著者は博士（芸術学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。